

月刊『カーサ ブルータス』  
\*Life Design Magazine  
casabrutus.com

今、知りたい現代アートの教養。  
日本の現代美術作家スター名鑑!

BRUTUS®

# Casa

6

2020 vol.243  
JUNE  
¥990

**STARS:**  
Six Contemporary Artists  
from Japan to the World  
現代美術のスターたち

村上 隆  
李禹煥  
草間彌生  
宮島達男  
奈良美智  
杉本博司

**THE DORAEMON  
& ART**  
ドラえもんアート。



LOOKING FOR  
NEW  
JAPANESE  
CONTEMPORARY  
ART

日本の  
現代の  
アート  
まとめ。

2020年6月号 (毎月9日発行) 5月9日発売 午銀3年4月17日 第三刷部発印部部部 第21巻第6号

# LOOKING FOR NEW JAPANESE CONTEMPORARY ART

# 日本の 現代の アート まとめ。

村上隆、李禹煥、草間彌生、宮島達男、奈良美智、杉本博司。  
日本が世界に誇る現代美術作家が集結する展覧会『STARS』が今夏に開催予定です。  
一方、2018〜19年に開催された『Harajuku Auction』は若手やストリートアートをフィーチャーし、  
ミレニアル世代を巻き込んで大盛況のうちに幕を閉じました。  
もはや、現代アートはインテリア、食、ファッション等と同じく、豊かな暮らしに必要な教養のひとつ。  
そこで、巨匠から若手まで、今、知っておくべき日本の現代アートをまとめます。

村上隆  
李禹煥  
草間彌生  
宮島達男  
奈良美智  
杉本博司

名和晃平  
杉戸洋  
目[mé]  
黒坂麻衣  
桑園創  
サイモン・フジワラ  
田島美加  
大竹利絵子  
松江泰治  
春木麻衣子  
小牟田悠介  
武田鉄平  
MADSAKI  
山口歴  
舘鼻則孝  
川内理香子  
佐藤允  
AKI INOMATA  
佃弘樹  
小林健太  
多田圭佑  
クサナギシンペイ  
熊谷亜莉沙  
楊博  
キャノン茉耶  
後藤映則  
桑田卓郎  
EVERYDAY HOLIDAY  
SQUAD  
吉田藍子  
Houxo Que  
益永梢子  
津田道子  
荒木悠  
飯山由貴  
野本哲平  
4649  
宮原野乃実  
山田溪樹  
藤原聡志

## あんなことこんなこと できたらいいな (2019)

2002年の『「THE ドラえもん展」依頼：あなたのドラえもんをつくってください (藤子・F・不二雄)』に始まる村上隆とドラえもんのコラボレーション。ドラえもんの登場人物とともに、村上が作り出したキャラクターの「かいかい」と「きき」がお花畑の上を飛ぶ。

2019年(ペロタン東京)の村上の個展『スーパーフラットドラえもん』より、『THE ドラえもん NIIGATA 2020』でも村上作品が展示中。

Installation at "Superflat Doraemon",  
PERROTIN Tokyo, 2019 photo  
by RK (IG:@rkrkrk)  
©Fujiko-Pro.  
text\_Jun Ishida

## 現代アートの未来は彼らがつくる。

彼らの作品には社会の“今”がそのまま反映されている。国内外の美術館やギャラリー、アートマーケットで話題となっている、次世代を担う若き才能を一挙紹介。

# UPCOMING

photo\_Mie Morimoto text\_Keiko Kamijo (p.80, p.90), Jun Ishida (p.91), Shiho Nakamura (p.81, p.100-101) editor\_Keiko Kamijo



Painting of Painting 036 / 右  
Painting of Painting 034 (2020) / 左

「絵画のための絵画」というシリーズ。サイズはすべて91×72cm、作品によってアクリル絵具と油彩の両方を用いている。

## 10 UPCOMING ①

# TEPPEI TAKEDA

武田鉄平 (1978-)

絵画でしか見えない何かを  
“誰でもない顔”に込める。



1 《Study for Painting 002》最近取り組み始めたという花をモチーフに描いたシリーズ。2 《Painting of Painting 017》。3 《Painting of Painting 018》顔が消されたあるいはないように見えるが、武田は「顔のように見える何かを描いている」という。じっと見ていると、だんだん誰かの顔に見えてくる。



1978年山形県生まれ。武蔵野美術大学を卒業後、2005年に山形へ帰郷。2013年に現在のスタイルでの絵画制作を始める。2016年に山形市内のKUGURUにて初個展『絵画と絵画、その絵画とその絵画』を開催。昨年、初作品集『PAINTINGS OF PAINTING』をユニテッドヴァガボンズより刊行。

## 鮮

やかな色使いでたっぷりと絵具を厚盛りにし、一気に描かれたような勢いのある筆致のポートレート。描いたのは37歳でデビューしたアーティスト武田鉄平だ。

武田は美大でグラフィックデザインを専攻し、デザイン事務所に入社したが3年で退社。山形に戻り、家業を手伝いながら絵画制作をしていたが発表の機会はなかった。武田に転機が訪れたのは2016年、キュレーター宮本武典に絵を発見され個展を開催すると一気にアート界から注目を集めた。

実はこの絵、全然「一気に」なんて描かれていない。実際の絵を近くでよく見ると、絵具の盛り上がりもない。完全にだまされてしまったとわかると、なぜそんな絵を描いたのかという疑問が湧く。

武田の絵の制作プロセスはこうだ。雑誌のグラビアなどから任意に選んだ顔写真をモチーフに、A4サイズの紙にドローイングを描く。同じモチーフで何十枚もの筆致を試し、その中から1枚を選び出して撮影し、パソコンに取り込み加工を施す。そこで初めて下絵が出来上がる。下絵を細い筆で丹念にキャンパスへと写し取る。最初は1枚描くのにも3か月以上かかったという。途方もない作業だ。

その間、武田はひたすら「絵画」と向き合う。作品集に添えられた宮本の文章の中で武田はモチーフについて「何でもよかったんです」「描くことに没頭できるなら、顔でも、花でも、何でも」と語る。

武田が丹念に描き出す「誰でもない顔」は、デジタル加工の時代の「見る」を何重にも転倒させて絵画の真実を突きつけてくる。



24

AKI INOMATA

AKI INOMATA (1983-)

《貨幣の記憶》(2018)

東京藝術大学大学院修了。生物との共同作業のプロセスを作品化する。2019年、〈十和田市現代美術館〉で個展を開催。同年、第22回ミラノトリエンナーレに出展。

生物との共同作業が生む  
無限の可能性を秘めた物語。

“生物との共同作業”という主題を見つけているので、きっと彼女は一生旅先がはっきりしている。掛け算の対象は多様だが、旅先は定まっているので無限。あとは興味を片手に進むのみ。コンテキストのユニークさだけでなく、着地が美しい。そして彼女も美しく、聡明でありながら、前に向かう貪欲さがある。購入した《貨幣の記憶》は、5年を費やし、真珠貝の自然の営みにより貨幣の象徴を生み出した二点一対の作品。これだけで空間を支配する質量的ボリュームを有す。電子マネーの時代に太古の貨幣に想いを馳せる。“生物との作品”により、電子マネーをも想起させるというストーリーテリング。

選んだ人



遠山正道 絵の個展をきっかけに〈スマイルズ〉を創業。〈So up Stock Tokyo〉などを展開。現在は「The Chain Museum」「ArtSticker」なども手がける。

# NEW GENERATION

photo\_Satoshi Nagare (p.102) editor\_Akane Maekawa, Housekeeper

現代アートの識者が選ぶ  
イチ推し作家リストをチェック。

次の時代を席卷するアーティストは誰なのか？  
現代アートへの審美眼を持つ識者たちに、  
“次に来る”現代美術作家を教えてください。



25  
**RIKAKO  
KAWAUCHI**  
川内理香子 (1990-)

《all same brain》(2018)

多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻を卒業した後、同大学院を修了。「身体」をテーマに、食やセックスなど肉体的・精神的な人間同士の関係を描く。

冷たくも温かい、アンビバレンスな世界。

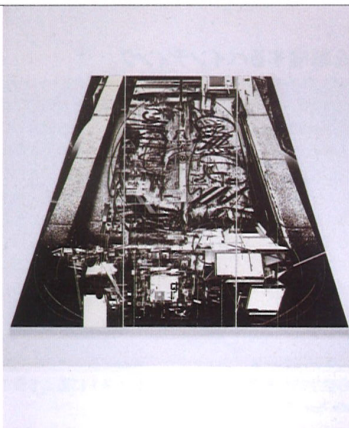
東芋の作品が出ていたのを目当てに行った、2019年に〈ギャラリー小柳〉で開催されたグループ展『drawings』で、初めて作品を拝見しました。作家本人もそのときギャラリーにいたのですが、冷たさと温かさが同居しているような、有機的ながうつくしい作品の雰囲気にと惹かれました。東芋の作品にも通じるところがあるのかもしれないですが、相反

する要素が存在するアンビバレンスな世界が、なんだかパーソナルにもしくりくるといえるか、個人的に「小さな深い」共感を抱くところがありました。新型コロナウイルスで停滞する世界の中でもちゃんと存在し続けている要素を描いているともいうのか、彼女の作品はこの今にもシンクロしている気がします。今後活躍も楽しみです。

選んだ人



**山本憲資** 1981年兵庫県生まれ。広告代理店勤務、『GQ JAPAN』の編集者を経て、〈サマリー〉を設立。経営者としての活躍に加え、アート、食、音楽などへの造詣も深い。



26  
**HIROKI  
TSUKUDA**  
佃 弘樹 (1978-)

《Strict Gate》(2019)

武蔵野美術大学映像学科卒業。手描きのドローイングや写真をデジタルコラージュし、現実と仮想を融合した作品を制作。昨年、〈群馬県立近代美術館〉で個展を開催。

現実と仮想世界を浮遊するデストピア。

アンドレ・ブルトンの提唱した幻視力という言葉に影響を受け、並行世界とデストピアを想起させる世界観を表現する佃弘樹。〈NANZUKA〉には最初期の2006年から所属している。当時はグラフィックデザインを主戦場としていたが、昨年には〈群馬県立近代美術館〉で個展を開催するなど、ここまで着実にその実力を伸ばしてきた。今では、ドイツ有数のギ

ャラリー〈Gisela Capitain〉とニューヨークのリーディングギャラリー〈Petzel〉に所属し、その作品は〈ニューヨーク近代美術館〉にも所蔵されている。アートという概念が、人類史上初めて地球規模で統合した21世紀のアートシーンにおいて、今後大きく羽ばたくポテンシャルを秘めている数少ない1970年代生まれの日本人アーティストの一人だ。

選んだ人



**南塚真史** 〈NANZUKA〉代表、キュレーター。2019年、渋谷バルコにメディコム・トイ、小木「Poggy」基史×ディナ・インターナショナルと共同でショップ〈2G〉をオープン。



27  
**TEPPEI  
TAKEDA**  
武田鉄平 (1978-)

《絵画のための絵画006》(2015)

武蔵野美術大学卒業。2005年より故郷の山形県にて作品制作を開始。2013年頃より、人の顔をテーマにした抽象画を制作。2016年山形市内〈KUGURU〉にて初個展。

あなたと時代を見つめる、表情豊かで無表情な“顔”。

武田鉄平さんの絵は、一見すると筆で絵具を伸ばして、短時間で描き上げたように見えますが、実はそうではありません。一つ一つの線を丁寧に描いていって、その連なりがグラデーションになった細密画なのです。しかも1枚の絵に、下絵が数十枚、あるいは、100枚単位で存在しています。武田さんのような手法を用いる画家は、他に少ないのではないでし

ょうか。また見る人に不思議な印象を与える、その抽象的なイメージにも惹かれます。キャンバスからこちらに迫ってくる迫力。時間が凝縮した一瞬の表情。この顔を見ることによって、今という時代を考えるきっかけにもなりそうです。武田さんは現在、描くモチーフを植物などにも広がっています。今後の世界的な活躍を期待してやまないアーティストです。

選んだ人



**森岡督行** 期間ごとに1冊の本のみをセレクトし販売する書店〈森岡書店〉代表。著書に『荒野の古本屋』などがある。第12回shiseido art egg賞の審査員を担当した。



28  
**ATARU  
SATO**  
佐藤 允 (1986)

《無題の朝食》(2018)

京都造形芸術大学芸術学部を卒業。現在は東京を拠点に活動する。恋愛や恐怖、強迫観念といった人の持つ心理をテーマに、鉛筆による線描写で作品を制作。

心に潜む狂気を暴く、グロテスクな潔さ。

佐藤允は独特の世界観で、自画像や男性像を描いている。グロテスクな描写や色使いで表現される、一度見たら脳裏から離れない表情や眼光。そうした要素から作り出された強烈に独特な作品の数々に、私たちは引き込まれてしまう。また彼の作品に触れると、見てはいけないものを見ているような優越感さえ感じられる。しかしその魅力を、彼の心の中の狂

気に惹かれていたのだといえ、それは偽善的なものになる。実際には、誰の心にもある狂気を見事に、正直に描いている彼の、その潔さに惚れてしまうのだろう。彼の作品には、人々の心の本質的に掘り下げて追求した時に生まれる美しさがある。そしてその美しさを作品として表現する能力の高さに、彼の超越した天才的なセンスを感じる。

選んだ人



**武田菜穂** 2002年よりNYで現代アートビジネスに従事。2009年に帰国後アートコーディネーション業務等を主軸とし、〈plug in+〉を立ち上げる。Art Basel VIPレップ日本を兼任。